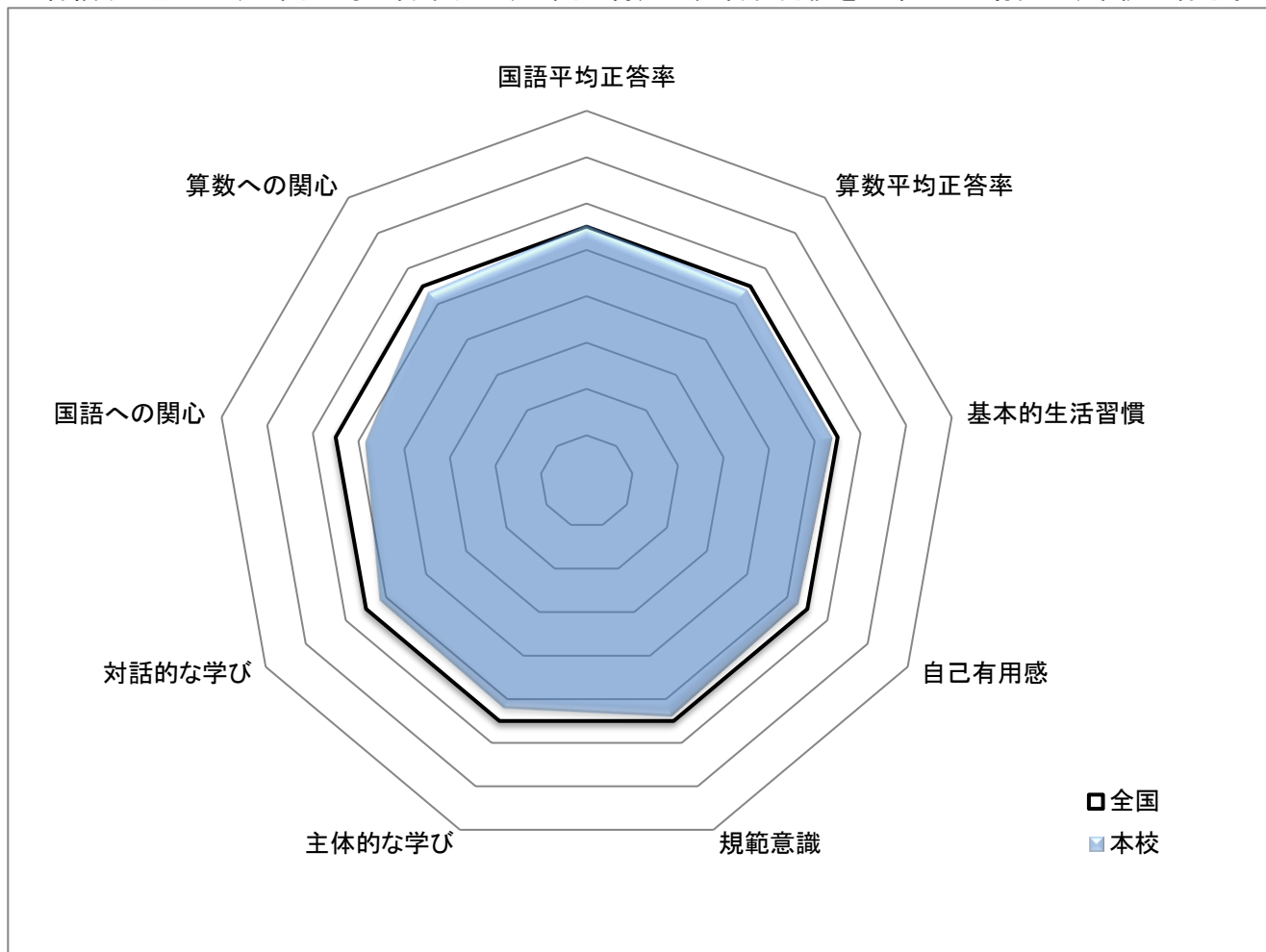


●各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《現状把握》

○国語は全国平均とほぼ同等、算数は下回っている。また、教科への関心は特に全国平均と開きがあることから、学習への意欲付けが不足しているといえる。
 ○学習習慣が身に付いていない児童も少なくないため、基礎的な学力の定着に課題がある。
 ○対話的な学び・主体的な学びなど学びに向かう力は教科への関心に比べて高いことから、児童の学習への期待感を損なわずに、教科の学習へとつなげる視点で授業改善を行うことが課題である。

《授業改善のポイント》

学習への期待を生かす授業改善
 ○児童の「できた」「わかった」という感覚を価値付け、学習が身に付いている実感をもたせる。
 ○自己有用感の土台となる教科の知識・技能面の習得させるため、朝学習や家庭学習で基礎基本を取り扱う時間を確保する。また、単元の授業開始時を中心に小テストを行い、定着度を把握する。
 ○国語科「書くこと」については、苦手としている児童が多いため、短い文章で要旨をとらえる場面や自分の考えを端的にまとめる場面を意図的に増やす。
 ○「めあて」「まとめ」など、児童の思考の流れに沿った板書、授業展開を工夫し、児童の意欲を高める。
 ○「ミライシード」の各機能を活用し、相互交流に生かす。

《チャートの特徴》

○すべての項目について全国平均をやや下回る、もしくは下回った。昨年度と比較して国語の平均正答率は向上していることは、国語科読むことにおける校内研究を実施した成果が影響した可能性が高い。
 ○しかし、国語への関心は低く、特に、「国語の学習は好きですか」の回答が全国平均の半数にとどまった。国語の学習に対する理解度は高まった一方で、その回答への自信は低いといえる。これは、自己肯定感とも関連していると考えられ、「できた」「わかった」を実感できる授業展開の工夫が必要であると考えられる。

《家庭・地域への働きかけ》

○ドリル学習を活用して、家庭でも一定時間学習に向かう習慣を身に付けさせるよう協力をお願いする。
 ○児童の成果物や単元の指導内容などから児童の学習課題を的確に捉えて、個人面談等を通して家庭と情報を共有する。